

遠く見ゆる烟突凄し冬の月  
僧一人味増たく寺や初時雨  
夢に見た人に逢ひたる十夜哉  
道絶えて狐の穴や枯野原  
鳴く千鳥雨を寒かる泊り客

三光

天、襟巻に首を縮めて網代守  
地、初時雨畔半ばに日の暮る  
人、砧聞きて襟元寒き夜船かな

追加

去年今年さぞな戦地の冬籠り  
霜の夜や細き野道を小提灯  
永き夜の碁客聲なし石の音  
日参や鎮守の庭の霜柱  
櫓の火や麓の家の疎らにて  
雲散りて石切る音や散る紅葉  
寺に行く瘦せた姿や茶の頭巾

川越閑人  
東京春綾  
神戸學洋  
無一庵奇零  
近江古杉  
遠州愛水  
下總梅泉

桑港のわびずまひ(ついき)

子

それよりその日の定まれることをなして十二時を  
迎へ、マダムに手傳ひてガスの火にての料理、朝  
と同じやうなことをして二時まで働くのでござい  
ます。この間に本を習ひ、質問をし、手も耳も口  
も忙はしい。二時には主婦はハイスクールにゆ  
き、主人は馬車を驅りて遊びにゆくのは常のやう  
になつてゐます。五時まではわがグードタイム、  
公園にそゝろあるきしやうと、友人を訪問しやう  
と勝手なのでありますが、留主居をして、來客に  
挨拶し、電話をうけなどとすると、御機嫌甚だよろ  
しいのでありますから、近頃は外出せず、ケツチ  
ン大王となりて、勉強したり、手紙書いたり、花  
園のそゝろあるきして歌でも口ずさんだりして居

ります。若しや戀しき人の乗れる電車にあらぬかと、階段にそつて立つて見る折もございませう。浮きたる戀と嘲り玉ふか。浮世の人の知らぬわが戀、この人のために富貴も功名もすてはて、十年の辛苦、唯ゆるすの一言に救はれたく、この人の跡を追ふてこの國まで來りしもの、わが想ひの雲サンフランシスコの朝霧と共にはるゝはいつぞ。雲にあらず濤にあらず、前途幾億萬里、恨めしきは吾身でございませう。かの人は太平洋沿岸の仙郷に客遊して居るのであります。海岸通ひの電車はこゝを通るので折々は戀しさに飛びいだすことがございませう。余り天機をもらすとお里が知れますからこれはこれだけといたしませう。五時には再びストーブをしつらひポテトを煮る仕度をなし、馬を飼ひ花に灌いで居る間に主婦もかへり料理をはじめ

め、また例の質問やら教習やらやつて居るうちに晚餐をすましあとをかたつけ八時にはおやすみの一言をのこして、自分の室にかへるのでございませう。ガスを點じたるのち、机によりて夜ふくるまであは瞑想あるは讀書、電車の音もとだへて、耳をすませば、大洋の浪の音かすかにきこえるのですもの、血の通ふうらは、この望郷心どうしてなくなりませう。夢は漁村にさまよひて子守を教へたとし、幻は弘城の花野を驅りて、うるはしの唱歌の聲に現にかへるなど、面白くてまだ悲しきは夜半のねざめでございませう。年たけたる教へ子だちの細き聲にてうたふうた、わが幻覺に銘して居るもの一つ、書いて見ませうか。

別れほど世の中に悲しきはなかるべし悲まじと思はねどなほいと、眷はしく見るごとに聞くごとくに想ひやまざるア、ア、ながひれば澄める月遇ひ見てし昨日までかくまでに思はねど別れしそれよりは、なほいと眷はしくまことなる身の想ひ、この心誰れか知るア、ア、悲しきは別れなり

毎日午前の仕事一週色々にわかれて居るのであります、順序立ちてまことに氣もちよいのです。月曜は窓拭きをいたします。

わが國の洋風建物など、窓拭を怠るために大いに雅致を殺ぐことがございますか、流石は本家筋のこと、それ専用の石鹼があるのですもの、それはそれは見ごとに奇麗になりますよ。

火曜日は洗濯、自分と三人前だけ、それに薬品も

器械も完備して居りますから手早くするといつも午前中にすむのです。

水曜はアイロン、火熨斗をかくるのであります、これは極めて容易の仕事です、こし急ぐと午前にタイムを取ることができません。

木曜は二階の掃除、主人の部屋と主婦の室と浴室と客間と便所と掃除して絨繡をしきつめたる、曲り曲りし階段をスウエプしたらそれでよろしいのであります。

金曜は階下の二間、食堂と應接の間とをしますのであります。應接の間には寫真器械あり蓄音機あり主婦手製の寫真、その説明をさいて居るうちに十二時になることがございます。そこにはピアノも据えられてあるので、かなで、見ることもありますが、この指なかく云ふことをきかせんか

ら困つて仕舞ひます。

日曜は食事のあとかたつけの外全く仕事なくその日の暮かたにはいつもその週の賃金三弗をわたすことにしてゐます。

一ヶ月十二弗の下男、桑港ではまことに御恥かしいほど下等でありまして、金ははしく渡米せる身には思へば情けなくなりですが、郵券の外必要もなきことです。露の筆も貯へて目的の一つに充てやうと思ふて居ります。

一体はじめは十五弗の約束でしたが學科を教ゆるから、月謝として三弗だけさしひくと云ふのです。そこは米國の米國たる所以、諸哉々々と云ふよりいたしかたありません。面白くもなきわびすまひの愚痴ものがたり、讀者はさだめし御退屈でしたらふ。からだばかりか心までかよわくなりし吾、

やむなくんば無形の財産をつくりてそを土産としてかへることにいたしませう。黄金と云ふものの中に逃足はやく、吾等風情の瘦腕にてはとも捉へることはできません。この國にては毎年一万弗づ、新流行の衣裳に費す女、千人以上あると云ふことでありますが、羨ましいいと云ふてよきか、情けないと云ふてよきか、なるほど賃金でもとらぬと、大騒するは無理でもありません。吾身など金だにあらば、教へ子たちと悲しき別れをするに及ばぬのでございますが、四百四病の外の病に胸をいためて居るもの、孔子様ぢやないが、終日食はず終夜いねす以て思ふ働くに加かず、いつまでか變成女子の奇蹟を演じて居られませう。今に見よ金剛那羅延身を現じて、大活躍をするぞと、憤起するときもございませう。

この地はいつも春景色でありますが。故國は紅葉狩のたいなかと存じます。今霄も一瞬三萬里、教へ子たちと夢遊の遠足をいたしませう。(完)

新刊案内

家庭母のみやげ 全一冊 東 基吉編  
童話

大々的豫告の出た本書は先月始め出版されたと申す事で、此頃著者東君から一部贈られた。打ち見た所和装の美本で、開巻先づ岡田三郎助氏の三色版の美麗な口繪がある。頁数は二百頁に餘り、凡べて五號文字の總振り假名附き、所々に面白い挿繪も随分多く這入つて居る。

大體の体裁はざつと右の通りで、さて中はどうかといふと、いろ／＼なお伽話の數三十七八種其他

には、所々に紙細工や、一口噺や、室内遊戯などを收めて居る。著者は豫て人の知る通り永くお茶の水幼稚園に居られて、幼児の保育といふ方に専心従事せられて居る人、吾々は此の類の書物の出ることを久しく著者に囑望して居たのである。従つて、本書 お伽話の選擇にも、多大の注意を拂はれたと見えて、大抵子供の嗜好に適當した様な、無邪氣で面白い教育的な、そして最も耳新しい類が、澤山集つて居る、勿論、我輩は著者と同じ様に教育的といへば、何でも乎でも小學校の修身の實例の様なもの許りを望むのではない。悪い例を與へないで、子供に愉快と満足とを與へてその適當に經驗界を擴げて行けさへすれば夫が即ち教育的であらうと思ふ。之に付いても思ひ起す事は、從來教育の方の頭のない人の手になつたも